

紹介と批評

ロビン・コーエン著（駒井洋訳） 『新版グローバル・ディアスポラ』

はじめに

この度、本誌の「紹介と批評」で取り上げるのは、Cohen, R. 2008 *Global Diasporas: An Introduction* (2nd ed.), London: Routledge の翻訳書である。初版は一九九七年刊行なので、新版はその約一〇年後の出版となる。新版が出版されたのは、ディアスポラ概念を利用した現代国際移民の動態研究への支持が高いことが証明されたからであろう。本書には、さらなる概念的洗練を求めると同時に、概念の適用範囲を拡大しようという意図が明確に窺える（第一版は駒井洋監訳、角谷多佳子訳で明石書店より二〇〇一年に刊行されている）。

ロビン・コーエン（Robin Cohen、一九四四年―）は、南アフリカ出身の社会学者で、オックスフォード大学名誉教授（同大学国際移民研究所所長）である。ヨハネスブ

ルクに生まれ、学生時代に反アパルトヘイト運動に参加した後、一九六四年に渡英し、バーミンガム大学、ウォーリック大学やケープタウン大学などで教鞭をとった。批判的な立場から労働力移動論や移民研究を専攻し、一九八七年の著書『労働力の国際的移動——奴隷化に抵抗する移民労働者』（明石書店、一九八九年）と、二〇〇〇年刊行のポール・ケネディとの共著『グローバル・ソシオロジー（１、２）』（山之内靖監訳、平凡社、二〇〇三年）が日本で翻訳されている。つく最近の業績とくは、Cohen, R. and G. Jonsson eds. 2011 *Migration and Culture*, Cheltenham: Edward Elgar および Cohen, R. and P. Toninato eds. 2009 *The Creolization Reader: Studies in Mixed Identities and Cultures*, London and New York: Routledge がある。国際社会学の泰斗である。

筆者による新版刊行の正当性の根拠は、「新版への序言」によると以下の通りである。

第一に、一九九七年以来相当量の概念的文献が蓄積されてきており、その多くは私の提唱を支持しているが、若干は批判的である。批判の内容を正しく把握することはかなり難しいものの、批判に全く答えないことは傲慢

な行為である。

第二に、この一〇年間の社会科学と増加傾向をみせる人文科学におけるディアスポラに関する比較および理論的研究の量だけをみても、実に驚くべきものがある。私のは、この新版で、決して網羅したというつもりはないものの、これらの萌芽的な文献の若干を選択した。

第三に、九・一一以後の多くの論調と同様に、ディアスポラについての議論も安全保障の論題へと引き寄せられた。ディアスポラ的なアイデンティティは居住する国への潜在的な裏切りを含意するものであろうか。それはどのような帰結を伴うのか。今やさらなる考察を必要とする(第六章と第九章を見よ)。

第四に、多くの場合、もとより、ディアスポラ・コミュニティは起源の土地に対して愛着を示してきた。これにより、ふるさとの地の経済的・社会的発展のためにディアスポラを利用しようとする多くの試みが、時には国際的開発機関や豊かな国の政府との協力のもとになされてきた(第九章)。それとともに「ふるさとの地」や「ふるさと」という観念がディアスポラという状況に内在的であるかどうか疑問視されてきた。

第五に、類似したり関連したりする多くの用語、トラ

ンスナシヨナリズム、ハイブリッド性、コスモポリタニズム、クレオールなどが流行するにつれ、時には相当の概念的混乱が起こった。この版では、これら四つの語のすべてはより一貫性をもって使用されている。

以上の引用では必要に応じて省略をしているが、批判への応答、初版以後の研究成果の吸収、九・一一以後の国際情勢の激変に合わせての変更、開発問題とディアスポラとの関係、概念の多様化と混乱への対応(概念のさらなる洗練)が、新刊の刊行を促したことになる。加えるならば、教科書としてもより使いやすいように配慮されている。翻訳は、国際移民研究では先駆的な研究を発表し、長年にわたり日本における国際社会学の発展に大いに寄与した駒井洋先生が担当しており、大変読みやすい。評者も移民国家オーストラリア研究のなかで、必然的に移民・難民受け入れと社会統合問題を扱ってきたので、国際社会学に多少とも貢献したと自負をもつが、本書は、国際移民研究の展開に大いに寄与する文献であると思われる。ここに紹介とともに批評をしたい。

構成(目次)と概要

本書の構成は以下のようになっている。

謝辞

新版への序言

日本語版への序言

第一章 ディアスポラ研究の四段階

第二章 ディアスポラの古典的概念

——ユダヤ人伝説の見直し

第三章 犠牲者ディアスポラ

——アフリカ人とアルメニア人

第四章 労働ディアスポラと帝国ディアスポラ

——年季契約インド人とイギリス人

第五章 交易ディアスポラおよびビジネス・ディアスポラ

——中国人とレバノン人

第六章 ディアスポラとふるさとの地

——シオニストとシク教徒

第七章 脱領土化ディアスポラ

——黒い大西洋とボンベイの魅力

第八章 グローバル時代におけるディアスポラの動員

第九章 ディアスポラの研究

——古い方法と新しい論点

訳者あとがき

参考文献、注、索引

本書でコーエンは、ディアスポラ研究の歴史を第一章で整理した後、第二章で「古典的なディアスポラ」(犠牲者ディアスポラであるユダヤ人)について説明するが、その際に、以下の点に注意するよう強調する。それは、ディアスポラとは何か、ということに關してである。普通、「ディアスポラ (diaspora)」とは、何らかの理由で意志に反して強制され異国の地に移住せざるを得なくなり、各地に『離散』して移動を続ける、あるいは、定住する人々である。ディアスポラはいつか故国あるいは祖先の地への帰還を強く望んでいるので、移住先でも伝統文化・生活様式・言語・宗教を維持し、同化せずエスニック集団として結束している人々であり、別の地に移住した同胞とも緊密な連携を維持することが多い。また、同化拒否者なので移住先で差別されやすいが、移住先に定住して同化し、現地の人々の文化・言語・宗教を受入れ、いずれは国民化するという通常の意味での「移民」とは異なる人々である(特徴づけられることが多い。その原型はユダヤ人(原型的ディアスポラ)である。しかしながら、コーエンは次のように指摘する。

「一三世紀までの時代から重要な結論を引き出しておきたい。つまり、バビロン、北アフリカ、スペイン、その他の地中海付近にあったユダヤ人コミュニティは、必ずしもユダヤにある失われたふるさとへの地に対して愛着を持っていることを特徴としてはいなかった」(七六頁)と指摘し、すぐにクリフォード (James Clifford, 1994, "Diasporas", *Current Anthropology*, 9(3), 302-38) の以下の文章を引用する。「分散して広がっているこの社会をつなげているものは、宗教発祥の地に対する (バビロン、パレスチナ、エジプトに住む) ディアスポラの忠誠心だけではなかった。それらは文化の様式、親族関係、ビジネスによる関係、旅行のルートを通じてもつながっていた。ゴイティン (Solomon D. F. Goitein, 1967-93, *A Mediterranean Society* (6 vols) Berkeley: University of California Press) が述べているように、中世時代にはユダヤ人が複数の特定の都市に愛着をもつという特徴が見られた (時には宗教とエスニシティの関係に勝る場合もあった) ことを考えると、ユダヤ人ディアスポラの『中心』を一つの土地に置くような定義づけはどれもあやしいことになる。スファラディム (イベリア半島出身のユダヤ人) の間では、一四九二年以降でさえ、彼らが『ふるさと』としてなつかしんだのは

聖地とともにスペインの町だった」(七六―七七頁)という点を強調する。つまり、中心を一つにした犠牲者ディアスポラとしてのユダヤ人イメージは、むしろ一九世紀後半のシオニズムの展開とともに生み出された反ユダヤ主義 (反セム主義) の嵐のなかで、つまり、ユダヤ人による定住地と聖地への二重忠誠の維持と、定住地への同化への可能性が失われていく過程のなかで生み出されたものだという (八五頁)。

本章の結論でコーエンは、伝統的ディアスポラ解釈に反論したアーサー・ケストラーの議論を踏まえて (七九頁)、「ディアスポラという概念の核に支配的に存在しているのがユダヤ人の伝統であることはすべてのディアスポラ研究者が認めている。しかしながら、この伝統を十分に考慮しなければならないとしても、それを超越することもまた必要である」とする。そして、「ユダヤ人のディアスポラ経験が多くの人々が考えるよりずっと複雑で多様であることを示すことが重要」であり、「ユダヤ人は単一の民族ではない、彼らは多くの側面を持つ多くの地域にまたがる歴史をもち、そのルーツは遺伝学的には錯綜している。他のエスニック集団と同様に、彼らの歴史は社会的に構築され、歴史の解釈は選択されたものだった。…… (省略) ユダヤ

人の移民の歴史における自発的要素もまた軽視されるべきではない。祖先のふるさとの地の外にある多くのユダヤ人コミュニティは、交易と金融のネットワークの増殖から生まれたものであり、強制的な離散によるものではない」(八六―八七頁)とも指摘する。

第二章は、ユダヤ人ディアスポラに対する伝統的解釈を超えることを明らかにして、ディアスポラ概念をより広く適用することを宣言するためのものであった。このことはつきりさせておかないと本書の意図するディアスポラ概念の再構築・再編、そして拡大適用が不可能になるのである。とはいえ、犠牲者ディアスポラはユダヤ人以外でも存在することを論じるため、第三章で改めて犠牲者ディアスポラであるアフリカ人、アルメニア人などを論じるが、その後、より広い意味でのディアスポラの存在を論じる。第四章では、「労働ディアスポラと帝国ディアスポラ」(年季契約インド人とオーストラリア人)について論じ、第五章の「交易とビジネス・ディアスポラ」では、中国人とレバノン人ディアスポラについて提示し、概念の多様性を論じる。その後、第六章でディアスポラと故地との関係も曖昧・複雑化していること、カリブ人を例に脱領土化されたディアスポラの登場(第七章)について論じ、そして現代

はディアスポラのグローバル化が進んでいるとさらに論じる(第八章)。最後に、ディアスポラは本来、創造的で優秀な人々であり、エスニシティへの強い拘りをもつものの、移住先の文化・言語・宗教とも折り合いつつ、うまく対応できるコスモポリタンな性格を強めているので、こうした優秀な人々を生かすも殺すも、受入れ国次第だという。つまり、受入れ先の国民が異文化に寛容に対応できるか否かによるのである。ディアスポラ受入れ国の対応には、困難かもしれないが多文化承認・異文化交流主義的な対応が必要だと示唆して締めくくる(第九章)。

批評

ところで、評者にはディアスポラという概念はあまりなじみがない。もちろん、日本でも雑誌『移民・ディアスポラ研究』などが刊行され、駒井洋先生編集・監修のもと明石書店より刊行されたディアスポラ研究シリーズにより今では、日本でもなじみの概念となっている。しかし、オーストラリアの移民研究者である筆者は、あまり使わない。ただ、近年では、非英語系移民作家の活躍により多文化文学・ディアスポラ文学が成長し、オーストラリア文学のなかで確固たる地位を築きつつある(K・D・スミス/有

満保江編『ダイヤモンド・ドッグ——多文化を映す現代オーストラリア短編小説集』現代企画社、二〇〇八年参照。しかし、イギリス移民系の移民研究や連邦移民政策研究ではあまりみられない概念である。評者がS・カースルズとJ・M・ミラー(関根・関根訳)『国際移民の時代』(初版 一九九三年と第四版 二〇一〇年)を共訳した時にも感じたことである。明確な説明はなかったと思うが、カースルズとミラー両先生はあまり積極的にディアスポラ概念を利用していなかった。ついでにいうと、開発とディアスポラの関係についてもコーエンほど楽観的ではない。お二人は、自分たちをディアスポラあるいはその子孫とは考えていないのかもしれない。

それはともかくとして、今回、本書の第四章「労働ディアスポラと帝国ディアスポラ——年季契約インド人とイギリス人」を読んで、改めてディアスポラ概念に注目せざるを得ないと感じた(*本書初版の翻訳書出版の際にすぐ入手し、第三章「労働ディアスポラと帝国ディアスポラ——インド人とイギリス人」を読んでいれば、随分以前より注目できたであろう。別のことに気をとられていたとはいえない不勉強であったと反省している)。ただし、繰り返すが、オーストラリアの移民研究者はあまりこの言葉を使わない

ということはある。

それ故に本書で、多くの移住集団が様々な類型に基づくディアスポラとされているなかで、オーストラリアへのイギリス人移民達が、帝国という形容詞がついているとはいえ、ディアスポラだという指摘には大いに驚いた。オーストラリアは移民国家として歴史的にみても多様な人々を受け入れているので、ユダヤ人、インド人、中国人、レバノン人、そして日本人もいる。このような人々を広義のディアスポラと呼ぶことに抵抗はないが、イギリス移民系国民の先祖達がディアスポラということには正直驚いた。また、本書でディアスポラとされているアイルランド系移民も、歴史的にはイングランド、スコットランドからの移民の風下に長い間立たされていたが、今日では、イギリス移民系国民と同格の支配的地位に立つ人々として描かれることも多い(White Anglo-Celtic)。実際、アイルランド系移民は、イタリア・ギリシャ移民系国民と同様に労働党支持者として、オーストラリア政治を支えている。イギリス移民系は、本章で扱われる典型的なインド系契約移民である労働者ディアスポラではなく、むしろ移住先で支配的地位を築き、先住民やアジア系移民を周辺化し差別する立場に立つ帝国ディアスポラである。

労働ディアスポラとは、西欧列強帝国植民地でのプランテーション労働に従事する隷属的な非ヨーロッパ系植民地移民労働者のことである。他方、ディアスポラ概念に支配者・排他的な社会的強者としての意味をもたせたのが帝国ディアスポラであるが、この概念を明確にするために、ディアスポラ概念をユダヤ人から切り離したのである。それだけではなく、コーエンは、今日のイスラエルのユダヤ人もパレスチナ人に対して支配的・排他的な立場にいるという点を批判することも含めて帝国ディアスポラの存在を主張したいようである（二一〇―二一三頁）。

いずれにせよ、コーエンは支配的に立つイギリス系移民をもディアスポラに入れる。それは、すでにみたようにディアスポラ概念をユダヤ人特有のものから解放し、より積極的な意味を授け、かつ広い範囲で適用しようとするのだから当然である。実際、他のディアスポラのようにイギリス系移民の移住には何らかの強制的事情も絡んでいるし、今日でも異常なほど祖国イギリスおよび王室に関心を抱き、エリザベス女王Ⅱ世やチャールズ皇太子訪豪の際は大量の追っかけがでる光景は今も変わらない。ディアスポラ的心性が明確である。事あるごとに英国から出自を強調する傾向も同じである。

コーエンは「ごく最近まで、多くのニュージールランド人、カナダ人、オーストラリア人あるいはジンバブエ人がイギリス人としてのアイデンティティを主張し、かつ一つの国に決めず、両方に行くための手段として、かたくなにもイギリスのパスポートを離さなかった。あるいは、イギリス人ディアスポラの子孫である青年たちは、今も通過儀礼として一年間イギリス本国で過ごすことがよくある（彼らは、みな判で押したようにロンドンのアールスコートに集まってくる。アールスコートはヒースロー空港からもロンドンの中心部からも近く、大きなレンタルマーケットがある）」（二六一頁）と指摘する。それは間違いないので、英国系オーストラリア人を「ディアスポラ」と呼べないことはないが、ディアスポラ概念の拡張し過ぎではないかとの疑問も湧いてくる。

実際、コーエンは第四章冒頭に近いところで、「仕事を求めて海外に移住した集団をすべてディアスポラと呼んでよいかという問題については、これは明らかに用語の過度の拡大解釈であるといえるだろう」（一三三―一三四頁）と指摘した後、同文章につけられた注（二）において「もっとも、用語（ディアスポラ、評者）は大雑把な扱い方がされており、特に在米のメキシコ人、プエルトリコ人、

キユーバー人、ドイツ人、ポーランド人や、ヨーロッパやオーストラリアにやってきた多数のエスニック集団に対してもディアスポラという呼称が使われている。私はそういう集団を『ディアスポラ』とは呼ばない」(三八九頁)としている。この一文は労働者ディアスポラ概念をより明確にしようとする文章だが、評者にはディアスポラ概念そのものを曖昧にしているように思われる。

さらに、オーストラリア人のなかには、帰国への意志よりも独立国家への意欲も強く、多文化主義社会への志向も強いものも多い。これはアメリカ人やケベック人を含むカナダ人にもいえる。しかし、コーエンに従い帝国ディアスポラを当てはめれば、確かに単純な移民概念では捉え切れないオーストラリアのイギリス移民系国民の複雑な行動パターンやその心性を描くには都合のよい概念であることは否定できない。とはいえ、ディアスポラのなかには政治・経済的影響力をもつ人々も多く、やはりマイノリティであり差別され続ける離散の人々という古いイメージを払拭する必要があるとはいえず、コーエンが指摘するように貧乏でも差別的な立場のイギリス移民系国民は、出身国に対抗して自治や独立を求める人々であり(二六〇頁)、オーストラリア国内の他のディアスポラと同列に論じることのため

らいは残る。コーエンは、差別的な地位に置かれるディアスポラを帝国ディアスポラの存在、あるいは準帝国ディアスポラ的存在とするが(二四八頁)、差別する側の白人移民と差別されたアジア系移民(労働者ディアスポラ)の両者の立場が曖昧になる、という問題が生まれると思われる。また、様々な移民をディアスポラと呼んでしまうことに慎重だとはいえ、ディアスポラ概念を拡張することによって、そこに含まれていた何かが薄まっていく気がしないでもない。

評者が感じた「ためらい」は、オーストラリア人に関する記述だけであり、その他の点についてはコーエンの議論に対する異和感は感じられなかった。ためらいは、多分に評者が古いディアスポラの定義から抜け出せないからかもしれない。以後、気をつけたいと思う。いずれにせよ、本書は今後の国際移民の研究にとって重要な貢献であることは間違いない。本書が多くの読者を獲得することを大いに希望する。

おわりに

本書により、さらにディアスポラ概念の有効性が明確になり、その精緻化が初版に比べ格段に進んだことは間違いない。

ない。現代世界の「国際移民」がさらに精緻に研究できるようになるだろう。なお、先に紹介したオーストラリア短編集『ダイヤモンド・ドッグ』には、アウシユヴィッツの生き残りの両親をもち、戦後オーストラリアへ移住し作家となった人物による短編が含まれている。それは、ユダヤ系オーストラリア人定住者達がイスラエルに休暇のため帰郷し、なかにはそのまま定住することを考えた者もいたが、同質的文化のイスラエルに苛立ちを感じ（「ユダヤ人が多すぎる!!」）、多文化オーストラリアの方が居心地がよいとして「オーストラリアに乾杯!!」し、帰国するという話である（リリー・ブレット「休暇」参照）。

（明石書店、二〇二二年、四一四頁）

関根 政美